

こと殿たちの御気色は、いかにもなほ直らで、

この殿のかくて参り給へるを、

帝よりはじめ感じののしられ給へど、

うらやましきにや、またいかなるにか、ものも

言はでぞ候ひ給ひける。なほ

疑はしくおぼしめされければ、つとめて、

「蔵人して、削りくづをつがはしてみよ。」と

仰せ言ありければ、持て行きて押しつけて見

給ひけるに、つゆたがはざりけり。その

削り跡は、いとけざやかにて待めり。末の世

にも、見る人はなほあさましきことにぞ

申ししかし。

他の二人の殿たちのお顔の色は、どうしてもやはり直らないで、

この殿（入道殿＝道長）がこのように（帰って）参りなされたのを、

帝をはじめとして（その場にいた人々が）感心して大きな声で褒められなされたけれど、

（道隆と道兼は）うらやましいのだろうか、また、どういふわけだろうか、ものも

言わないでお控えになっていらっしやうた。（帝は）それでも、

疑わしくお思いになられたので、翌朝、

「蔵人に命じて、削り屑を（柱に）合わせてみよ。」とご命令があったので、（蔵人が）持って行って押しつけて

ご覧になったところ、少しも違わなかった。その削り跡は、たいそうはつきり残っているようです。

のちの世にも、（それを）見る人はやはり驚きあきれることと申ししたことですよ。